希臘十字

高祖保

青空文庫

目次

Lethe 7

硝子建築 14

共和国風俗 18

Archaic 24

湖畔集 26

Kalokagathia

「一一宇宙は、単にタアオラの殻にすぎない」（ゴオガン）

一と夜。あらしの怒号が落ちてきた。

この湖中に、一隻の汽船が沈められた。

朝。わたしは見た。マストだけが湖面に二つの手をさしあげてゐる。それは、わたしの双の手に肖て、空(あだ)な足掻きを仕つくして、倦い厳粛のしづもりに返つたといつたありさま。

けふも湖のほとりにあつて、追はれるもののごとく、右顧左眄(とみかうみ)しながらわたしは思ひ索める。二本のマストは微風を呼んで、湖面に二個の波紋を放つてゐる。あの下に、汽船はとらへ難い空を追ひながら、青い睡りを貪つてゐるであらう。それに似て索めるものは遠く　かに捉へがたい。竟にそれは何であらう。むなしくうち顫ふ、掌とゆびと。ひと日は思惟の彷徨につかれる。

湖の眼（まなこ）はこの二本のマストのほかに何もない。それは神秘を麾くトランシットに似たものである。ここからわたしは、あなたの眼のなかに澄んだ死海をみる。あなたの掌のうちにあるカロカガテイアを！　それらのものは　かに遠い。とらへがたい冷酷な距離よ。だが、おそらく思惟の犂のひとかへしは、この通俗な世界のかなの神秘を発掘するより首まるのだ。通俗は普遍のなかに、金鉱のやうにひそんでゐる。もし、あの神秘が地球儀のなかに眠つてゐるとすれば……

夕焼けのそらに、幾すぢの河が尾を曳いてゐる。
マストは暮れる。金星をいただく湖水の上で。
いまは詞（ことば）もなく、報らせもない。ただゆるぎない、無辜のひととき。微粒の砂に没するひかがみは、湖水のふかさを超えて土のふかさを知る。それは通俗の木に萌した神秘の芽であらう。これは誰に剪られ、誰に踏み蹂られるうれひすらもない。
そこに、夥しい通俗のひかりよ！
さうして、おお！　神秘の発芽よ！

希臘十字

日は亭午。——翼のごとく汝の双手をひらけ。而して、彳て。希臘十字にかげを曳かむ。

★

聖地の門を旋りながら、夜となく白日となく、蜜蜂よ。いつか門は十字に閉され、花々は霜に凍えた。蜜蜂よ。いかにおまへの翅が黄金の燦きにひらかれるときも、そこには展くによしなく、匂ふに術もない、空な影ふかいうれひのみ。このとき、訪へよ、蜜蜂よ、——もし神あらば燈火をかゝげよ、と。

★

門に青錆びた閂のいたさ。十字にかけた罪障の烙印……

★

聖水盤が匂ふ。暁闇のなかで。

希臘十字にかたどつた星。槓桿（ボオル）の星。素馨の花と音楽。悠遠なパントマイムのをはり。
その下から、郊外の一番電車が睡りの歌を撒きちらす。

★

傷痕。――それに蝟集する歌ごゑ。華やぐ疼痛の歌。歌に攀（よ）ぢのぼる射手座、雙女宮。そこから夜がおりる。
巨大な風車がアルコォルのやうに廻る。すると、翅のある時間が目にみえない素迅さでそのうへから飛びちる。
美の司祭者、夜よ。わたしはあなたの中にかくれた。すると、すぐさま傷痕は美化される！

★

海の目ざめ。
ひかりを鎧うた浄い暁のなか、蠢（むしば）まれた祈※、第3水準1-89-35］《いのり》の囁きがたちのぼる。一と夜、悪の扉に靠（もた）れてゐたかれらが、聖らかな眼ざめにかへるのだ。――一斉に咒詞を呟きながら。

Lethe

海燕と年

元朝のフレスコ風の雪のなかから、鵲(かささぎ)のやうに雪をかついできた郵便配達夫は、わたしに「おめでたう」といつた。かれはわたしの掌に、書翰の一束を落としてすぎる。晩香波にゐるF・Fの賀状には　リネンの月　という詩が印刷してある。その詩は剽窃だ。そして星に肖た海燕(ひとで)がひとつ。海燕はマン・レイ氏のシネポエムから、写しとつたのであるらしい。海燕は音楽のやうに唄ふ。

自家中毒

砂の上に、胴とその片眼が散らかつてゐる。その眼は過激な毒素　自家中毒　で爛れきつて

ゐるのだ。どうみても白日のランプのやうにぼやけてゐる。石の表情よりも、はるかに惨忍である。その上に誕生したのであらう。一匹の桜いろの蝶が、奇蹟のやうにひらひらと、平気で、わたしの視野を翔つていつた。ひかりの粉を撒きながら。……

Lethe

山から猟銃を担いで、ハンティングに雪の粉をつけて、さも殊勝らしく、鵜、鷸、それに山鳩に似た雉なんか腰にぶら下げたH・Hが、四分の二と四分の三拍子をかたみに組みあはせたRedowa《レドワ》の足どりで、やつてくる。

かれは、わたしに耳打ちして言ふのである。この猟銃は鳥を撃たなかつたのだと。さういへば、鵜も小雉もすつかり、眼の角膜が変色して凍みてゐる。これは小鳥売買組合出張所の、商人の手を経たものらしい。かれは、そつとわたしに耳打ちして、妻が鳥を食ふのが殆ど病気であること、先日はニイスあたりの白魚といふ渉水禽をとりよせたことなど、自慢らしく言つてかへつていつた。するとなぜだらう。かれの後姿からは、みるみるいぶかしい白い河が流れてきた。はてな。これは、わるくするとかれが夭折するのかも知れない。そこで、これは忘却の河 Lethe であると、姑く信ずるよりほかはない。

浄化

かれは、きやらめるをしやぶりながら、錬金術（アルケミイ）を説く。かれはこれで、前後三回、自殺をこころみて果さなかつた男である。かれの遺書も三通以上は、わたしの手もとにある。そのなかでかれは、自殺は罪悪ではない、むしろカタルシスを目的とする、古風な錬金術のながれを掬むものだといふのである。

かれの錬金術（アルケミイ）と遺書によるカタルシスは、どれほどわたしに、恐怖的な迷惑をかけたであらうか！　かれはアリストテレスをかざして、古典的悲劇を、そのカタストロフィを、身ぶりあやしげに、説いてきかせる。しかし、かれのアクションは、それ自身、喜歌劇（コミック・オペラ）のかてごりを脱してゐない。

過般、かれは地中海の最深処で投身する旨を声明したが、その実施期日たる十二月二十五日は、すでに過ぎ去つて了つたことなど、かれは　※（おくび）にも出したくないと言ふのだ。かれはエピクロスの偶然論を識つてゐるだらうか。思ふに、かれの如きは、メタフィジックの煙幕にかくれた。最も少数の　死　の　錬金術師　であるだらう。

昇華

理髪舗のあるじは嫣然とわらつて、鏡のなかで色学上の錯覚は、弁証法（ディアレクティク）のかたちで昇華することを告げてくれる。わたしの心の一部に、露西亜の小説家の　ヴォルガはカスピ海にそそぐ　といふ小説が浮んで、消えた。すると、たちまち、カスピ海の潮ざゐがわたしをさらつた。そこら一面に、サフランの匂ひ。頭の芯をめぐつて、銀の鋏から、金属製の花花が咲き出す。

……

わたしはいちはやく、おだやかな印度洋の春の風波（しけ）を、鏡面いつぱいに喚びおこすことに成功した。喜望峰のあちらからくる巻雲（サアラス）が榛（はりのき）の枝に梳（す）かれ、丸いかげを落としながら飛行船の銀の腹が、その上を通りすぎる。海は青鮫の砂ずりのいろに拡がり、空にちかい波と波のすき間から、聖らかな船唄が流れてくる。その下を沈んでゆく、ココアいろの快走艇（ヨット）。水脈（みを）をひいて消えてゆく、金字塔に似た戒克。わたしの心耳に、それらの像（すがた）が交錯した瞬間、わたしは理髪舗のたかい椅子から、はずんだ鞠のやうに転げおちてしまつた。

嫣然とあるじはわらつて、説明をくりかへしてゐるばかり。さうして、わたしの歯と歯のあひだに、噛みたばこが拉（ひし）がれたと思ふ途端に、なぜであるか、昏々とはてしのない、ヴィテイ

ゴの闇のさなかに、わたしは転落していつたのである。

菊

わたしが扉のノヴを後手に閉めて、室内にゐるかれを顧たとき、ちらりと青い菊がかれをかくした。かれは有数の考古学者で、ポリネシアの上代星座学を翻訳してゐる男だが、いつも卓子を海のいろをした天鵞絨で覆つて、その上に菊のやうな顔をのせてゐるのである。

かれはすぐさま話してくれる。かれの妻君は、大晦日の夜ふけ、場末で春をひさいで検挙(あげ)られた女であることを。さうしたかの女が、これはまた婆羅門教のVeda《ベダ》の、パセティックな讃仰者であることも附け加へながら。かれはその朦朧性についてほめたあげく、白痴のやうにわらふのである。

かれはポリネシアの古典学における、よきエピゴオネンだ。また思ふに、かれの心(エスプリ)はあたらしい！

唄の端くれ

あゝ　天心に馭者座(カペラ)かがやく
あゝ　この夜わが神霊　銀の天海を翔りて魚族(うろくづ)のごとし

あゝ　孤(ひと)りの天の座に青き菊の花匂へり
あゝ　まぼろしの針(ビン)　衣裳(コスチウム)よりぬきとり
あゝ　燦然として妖気に吹かれ
あゝ　天(そら)を射む

あゝ　橄欖樹の亭(たか)き梢(うれ)に　星くづ白くちりぼひて泪(なみだ)す
あゝ　漂泊の思念　星夜の頭(づ)にかがやき
あゝ　天馬かける青き息づきに夜は眠れず
あゝ　わが神霊　氷(こほり)よりさむし

あゝ　煌と
あゝ　天狼座(シリウス)はわが銃眼にこそきらめく

しばらくは払暁戦

——いまぞ殺戮（たたかひ）をはる時　宗治

もう、見るにたへない。

Koaos《カオス》の触角のむかふから、夜がおりる。

なんと狡猾稀れな夜であらう。けふも蝕まれた夕餐がちかづく。ゲオルグ・グロッスの悪の華。漫画（カアツーン）の上の、つめたい空気の翅（はね）。

わたしはいくたび夜を数へあげたか。わたしはいくたび、忍苦の血をすすつただらうか。

雨あがりの闇に、捕虜の首の座が輝いてゐる。空間を埋める退屈の花。すると花が流れてわたしを埋めるのである。いつかわたしの透明な思想だけが、そのなかで足掻き苦しむ。まて、足掻き苦しむのはわたしだけではない。透明なわたしの思想だけである。

しばらくは払暁戦。だが、暁は遠くにあるのであらう。無限の夜が、その向ふに錘（おもり）のやうにつらなる。

一ときの間は死んだやうに。

……

……

硝子建築

硝子建築

一

告げてよ。時間はわたしから、もうなにも引奪（ひったく）つてゆくものとてはない！　坐禅菊の上の、気随なボヘミヤ歌。噴上げの霧に弄ばれながら、詩人はうたふのである。　光が空に消え、よろこびが心に消える　と。

二

殖民地の地図の上なんかで游いでゐるメルズ。
一ぽんの赤い樹木がかぜに靡いてゐる。
三角洲（デルタ）は嗤ふ。
希臘十字のデフォルマションを。
地中海は貝殻だけ。

三

爾（きみ）よ、その双手を組むにさきだつて、その鶴のやうなるおん脚をば組みたまへ！

四

説教台（プルピット）のうへのささやかな典籍。これは弥撒書（みさしょ）といふよりも、翻波式（ほんぱ）の平脱鏡（へりだつきょう）。僧侶といふよりも、げてものの化仏（けぶつ）。とんちんかんに並んだゐねむり甎（せん）とでも。——

五

主の曰(のたまは)く。みまし指もて、その陰(みほと)に置け。

六

傾いた両手の裏(うら)に、平らかな夜が載る。新鮮なヤスミンの匂ひ。呂律なきエチュウド。よろしい！　奇蹟でないところの奇蹟が崩れおちてくる。それが、古代壁画の剥落とでもいつた趣き。

七

さいつ頃、手帖にかきとめておいた。こんな言葉をご存じか。

盂(う)。夾苧漆(けふちよしつ)。魚子地(なゝこぢ)。撥鏤(ばちる)。さうして祭※(パテーヌ)。

八

神々が麾く。おお、左右対斉（シムメトリ）のとれた平和よ、と。

九

人間万歳。
人体のパラボラよ。
醍醐味は至るところに溢れん。神々よ。

十

ある露西亜の処女読本からの抜萃。
　女性は透明体。ことに処女は硝子建築である……
処女読本の表紙のペンギン鳥。
氷の下の暁。
鵜秋沙（うあいさ）。

硝子建築のメンス！
硝子建築のエマイユ！

共和国風俗

共和国風俗

アルルにて。―おや、蠅が一匹。　（ルナアル）

＊

すると鳩が芝草におりる。
九月の処女。
白葡萄酒から虹がたつ。
書信のなかの花束には蜂が還つてくる。

楴(はは)※(のき)が咳をするたんびに、あのくれなゐの麝香の匂ひはどこからくるのだらう。

＊

鷲鳥は皿に棲んでゐる。
鼠の骨。薄暮(かはたれ)の雪。

＊

アカントスの一夜。辜鴻然といふ図書館長と、アルクヰン聖書に就てかたる。その日の日記。
「十三世紀英国のミニアチュウルの模写をみた。説明書のひとくだりが面白かつた。
九月。一一犁、種蒔、耙、玉転がし、竹馬。
なにかの参考にと写しとる。」

＊

鶏(とり)は鏡のインタアヴァルから餌をあさる。その上を世紀が蝶※(てふつがい)のやうに、せはしくめぐつ

てゐる。その音に私はふりかへるのである。ねえ、くれぐれも断つておきたい。不幸なのは僕は芸術家ぢやないといふことだ。山羊髭をたてに思ひあがつてはいけない。可愛いゝ山羊。眼鏡蛇のやうなお前よ。

＊

夜がふかくなる。おゝ主よ！　我化一管笛月下逢青蛾。あれ、風吹烏があそこに一羽。

＊

この学用患者は私をみて嗤ひだした。かれは杵屋もどきの声色で、なにやら一席うなつたのち、かう言ふのである。

「――零落れては一介の鴉。この迂愚なる旅人が旅宿を　れて五日といふ旦暮は、これなる（かれは首から下げたズダ袋をはたく科をしてみせる）山蟻、あれなる黄蜂の巣、さては天牛虫、油虫、これに酢模、山独活をそへ、いかに常食とはいたし候」

かれの営養価について私は手古摺つた。すると出会がしらに、山から帰つてきた芝師が答へてくれたのである。

「君の中風症はよほど進んでゐる。まさかあいつが！」

さう言ふや、ぺっとヒマラヤ杉へ唾をとばした。水盤のなかに、埃の吹いた拡大鏡を涵しながら。

＊

こんなことが実際あるとはしらなかつた。この湖べり一帯は、いたるところ土龍の作業場といつたありさま。説教師は小尖塔を仰いで、呪ひのさけびをあげる。

「なんぢ、無躾なる地下鉄の穴掘人夫。ふん、麾下の足もとに穴をあけたる猪首の半逆者め。太陽を睨んでみろ。喝！」

＊

大袈裟な常春藤のおつかぶさつた橋。これは！　橋の下に一家族がゐる！

＊

すでに土筆は記念碑。斑鳩（いかるが）のこゑは塔に。

＊

失敬。螽（いなご）が嗤ふほどのペシミスティックな子供たち！　汚れた足が落ちる。

＊

「金魚の尾鰭に、錫（すゞ）の鐶（くわん）。走れよ、走れと申されし」（類諺集）
この国に多すぎるものは、いびつな風癲者と佝僂（せむし）。それにどこか横紙やぶりの類諺集なぞ。

＊

ある月の夜。――片足をふみ外した陥穽（おとしあな）から、わたしはそつくり月の裏側をみた。さる人はニツケル製の湖水が光つてみえるといふ。足穂の天文学。いづれにしろ、無稽のいひぐさ。聖詩祈※、第3水準1-89-35］歌（オフアトリイ）を唄ひながら坂をくだる電車。夕べはそのなかで、亜孟（アメン）。

＊

アフロディテを絞殺せよ。火山湖のつめたい油（あぶら）がかれの脊髄の川に沿うて流れる。罪障消滅のために。最も文学的なる莟（ちさ）のメンス。どれ舌を出してお見せ！

博学人形。こいつ手おどりだけが能弁にできてゐる代物だ。主として唄ふうたは　キリエ《しゆよ》・エレイゾン《あはれみたれよかし》……

＊

国立動物園にて。

メガネをかけた房珠鶏の気どつた歩きつぷり。駱駝に跨つてゐる、悪戯（いたづら）ざかりの女狐（めぎつね）の子。みよ。カメレオンは強烈なチアノーゼに罹つた。ラレグル猿は跳ねてゐる。　補欠の跳躍選手！　だがこれらは、およそ時世粧であることが判る。

わたしの覚え書の結び。――「園長のつつましい敬礼をうけて、私は鶴のやうにここを去つた。」

Archaic

等閑(なほざり)の箱

そのモノトンな音を廻転させることにより
私に、その金網を張つた箱の内から
忍従のもつひとつの静かさとさびを教へてくれる
おまへ、こつこつ車を廻す白鼠よ
いつまで車を廻すのだ、その根気のよさで
その愛くるしく朱(あけ)の吹いた柔手(やわで)と、その足で、
しかしなんとわが友よ
（あるは無為なる「忍従」を献げる、小さい「行為者」よ、）
おまへも寂しからうにと、私は心配(こころがい)をする
——ころりころころとその車をば
廻して暮らすには、あまり等閑な一日(ひとひ)ゆゑ。

牧歌的

ききき　聴けよ
ややや　山羊の唄ふパストラルを

にににに　二三匹して鳴く
かかかか　閑夜の蟋蟀を

かか　竈のかげで
ここ　薦枕（こもまくら）のママママ　マシウ・アアノルド先生

かかかか　片隅の幸福
セセセセ　セラフィンの唄

よよよよよ　よろしい
猫はこれらの田園のなかを　よぎる。

雪

障子の外にはしろじろと暁が降り
微粉を撒いて吹雪はひつそり収つてゐる
鶴が啼いてゐる…

「門」から

湖畔集

湖畔集

その一

散歩道で。——粉碾礎（こなひきうす）のうへに粉とみたのは霜。その霜にひらりと、蜆蝶（しゞみてふ）が落ちてくる…。
蜆蝶と見れば、これは菩提樹（リンデン）のひとひら。

仰げば、リンデンの樹では鶯（うそ）の唄。

桑畑に遠い、冬の湖（うみ）。

その二

湖水の多景島で。——
あの羊腸たる※蟻門渡（ありのとわたり）をわたりながら、わたしはみごとO CARA MIA を鼻唄でやつてのけた。そのとき中空に、膜翅類（まくしるゐ）のむらがる幻影が、レリイフのやうに生じたのはなぜだらう。だが唄ひながら通りすぎたとき、仏蘭の覿面は、たちまち蹲いて、わたしの精霊は巌のうへから、あの湖中に散つたのである。
その証拠であらう。爾来、わたしの詩はアルカイックなものになつてしまつた。湖（うみ）をふるさ

とにして。

その三

七十人町で。——

あそこのマリオネットで、わたしは欠伸の滂沱たるなみだにかきくれた。なんといふ下劣な演出(だしもの)ばかりだ！　名ばかりが威(いか)つい万国抒情人形展。ところが、陳列人形を仔細にながめながら、わたしの彳(た)ちつくしたのは、ペルシャ猫の一対をあしらつた、モォラン張りの　花合戦である。愕ろきはこれにとどまらない。　桜井駅楠公父子の別れ　とかかれた題の下を、人形からでてきた鉄力(ぶりき)製のインコが青磁の皿をたたいてゐたが、わたしがゆきすぎるとき、そいつは精一ぱい叫んだものである。

「やよ待て、わが子！」

その四

桜馬場のともしい桜かげ。……

その桜よりも清楚な家族をもつたことを、わたしは私かに伐(ほこ)りとした。

春といへば、いつせいに並んだ桜の敬礼をうけて、わたしは将軍のやうに反りかへつて門を出る。

その五

夏はなにか眼に見えないものが湖をわたつて、和蘭陀夕顔のかげを、涼しく触れてすぎる。夜は食用蛙の唄。

蛙をたべて、蛙の唄をききながら熟睡（うまい）におちる宵が、蚊帳のなかに夜ごと健康をはこんでくるのを、わたしは夢まくらで識つてゐた。とりわけ打算的な睡り。

その六

初秋。紫薇のうすくれなゐが、つぎつぎと暦のやうに落ちつぐ。

その七

冬はわかい歯科医の雑木庭で、鶯日和。

なよやかに彼岸桜が帰り花を添へる。それへ根雪が、水銀色に零(こぼ)れて氷りはじめると、すでに一年のをはり。

暦は裸かになる。

その八

湖心亭で。――

一群の鳰(よしわりすずめ)鷸の田舎ぶし。アルバトロスのこゑは、夜かぜに湖へと畳み込まれる。あの曖昧な「楓橋夜泊(ふうけうのやはく)」を張継に書かせたのは、こんなところだらう。

月のいい湖上を、鳶いろの大鯰(なまづ)が二間のしぶきをあげて、遊弋する。

湖をかたむけた波が、霜ぐもりの朝、湖西のそらに虹をかける。下に、冬眠の館(やかた)を掻いこみながら。

その九

堀割の青みどろに、かげをうつす柳。そこには古今集のやうに鶯はこない。だが、小学一年

生のやうにならんだ雁が、その堀割をこえて帰つてゆく。たち替つて、泥を哺んだ燕尾服が、ひらりと宙返りをしながらやつてくる。
この街頭曲芸師に、さみだれる街区は帯よりもながい。

その十

カッフェと寺塔を軒なみに。
北陸から雪をかづいできた貨車が息をつく街。

その十一

紀元一千九百二十九年の春といふに、転生（パリンゼネシス）に肖た日のかがやきがわたしにきた。いはば暁のそれのやうに。湖畔の生活は暮れて、道しるべは東方をゆびさす。いつせいに身装（みごしらへ）をして、わたしは転生したのである。人間から昆虫へ！　燕のやうに湖をあとに。

青空文庫情報

底本：「高祖保詩集」思潮社
1988（昭和63）年12月20日初刷第一刷発行
入力：八巻美恵
校正：浜野智
YYYY年MM月DD日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

希臘十字

高祖保

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/